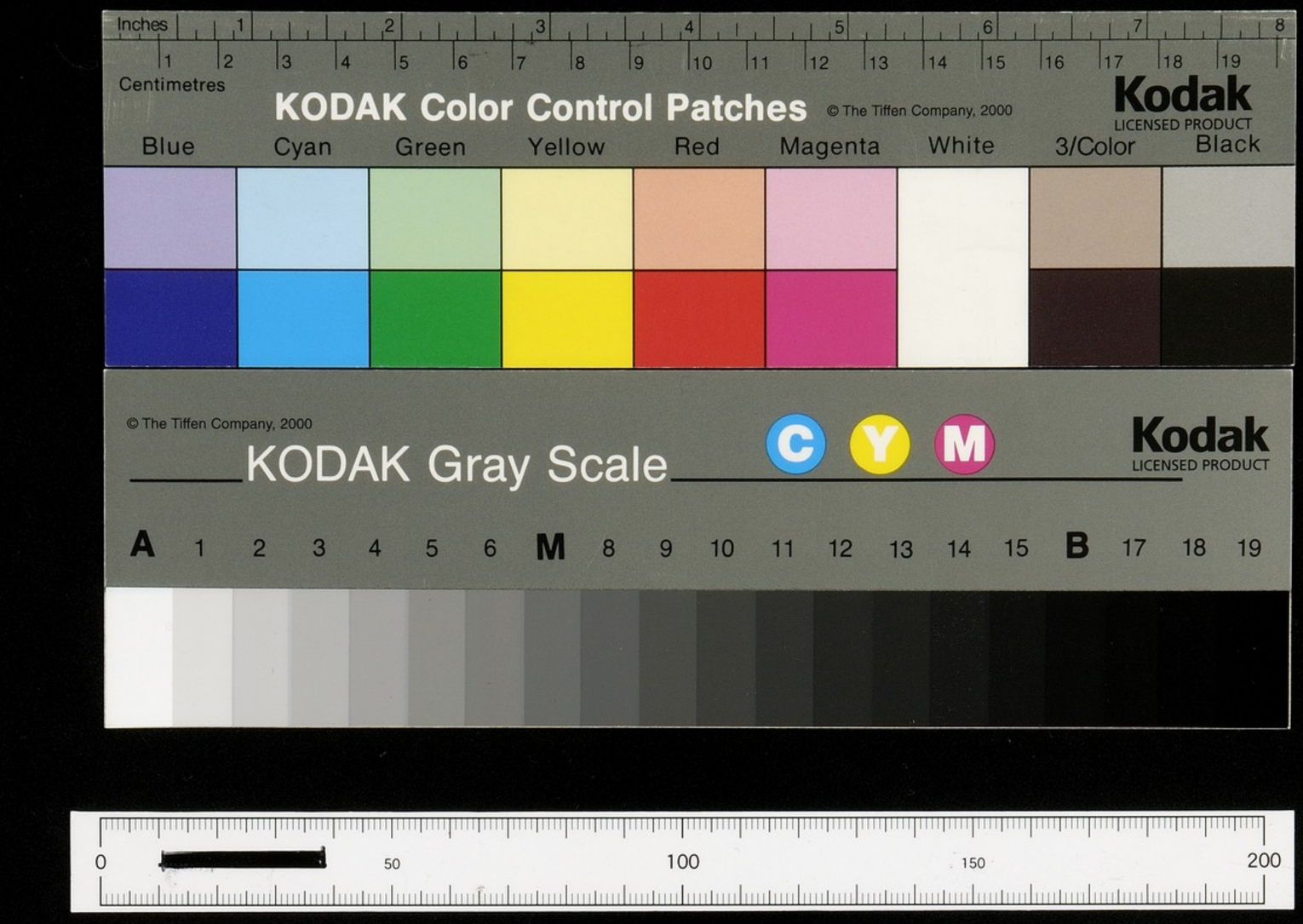

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

0
50
100
150
200


新鐫
椿説弓張月
續編
卷貳

『椿説弓張月』続編巻二

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月續編 卷之二

東都　曲亭主人編次

この巻ハ琉球國の開闢より。天孫氏二十五世。尚寧王中山世系を撰九四世。尚永王の子を又尚寧と編ふこれふあべ混するところなれの在位十八年のうち。日本近衛帝文壽二年ふ當るうち。かれが爲朝。十七才のこゝにおゐて。阿蘇の忠國が壻となりて九州を討ちさゞめひらかんところのくだり。前後二編の文の叙。ならびに琉球のうち說起ところ故よ。年序錯乱ところ續編ふ至ら。ゆゑんふ似ずり。閲者こゝにまひね次の巻も。亦この例よ倣ふところべし。

第三十三回

毛國將ぐ忠利勇を說破を
君真物の神王宮ふ出現い

福山女學院大學図書館

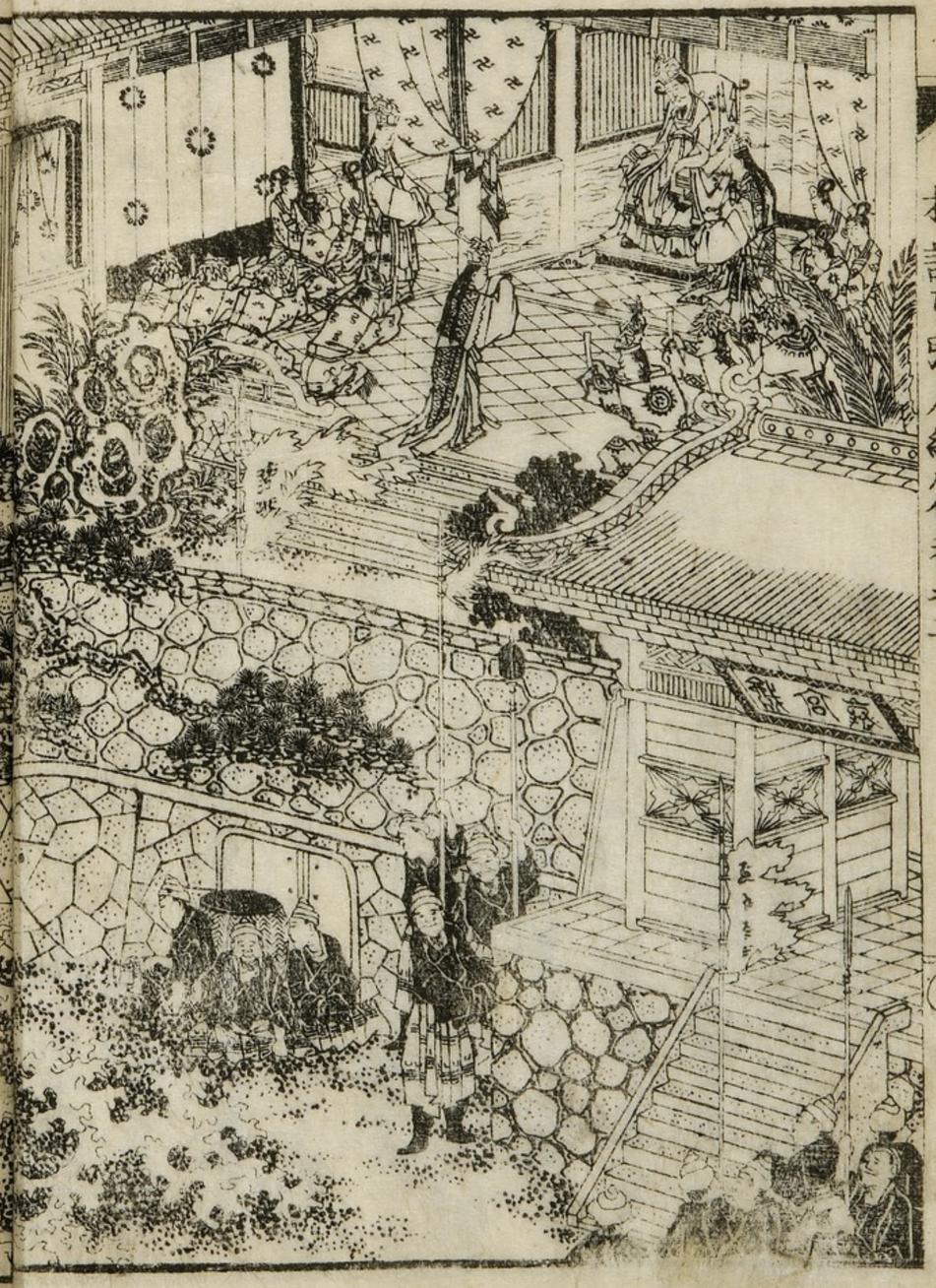
琉球國そのむかしめかるゐ。天地開闢の時一男一女化生して夫婦となる。これを阿摩美久と稱ふ。傳信錄ニ中山世鑑ヲ引ところかくのごとし一說ニ云。その人姓を歡斯氏名を渭剌覩ニ人これをよびて可老羊といひ。その妻を多按茶といふ又一說ニ云。その夫婦ともに是則阿摩美久の子孫ニ云ふ或いふ甚だ國王の姓氏ニこれ國王の始祖ニ云ふなり。二男を諸侯の始逐ニ三男二女を生む長男ハ天孫氏。これ琉球事略ニ庶民の始祖ニ云ふなり。二女を祝ゝと稱ふ。ゆゑハ天神となる。事略ニ一女を女君の始祖ニ二女を內侍の始祖ニ云ふなり。ふとうハ海神となる。事略ニ一女を女君の始祖ニ二女を內侍の始祖ニ云ふなり。ふとうハ海神となる。又長女を君ゝと稱へ。三男を百姓

尚寧王といふ。この時君德母衰て。社稷將ふ傾覆んとす事の監觴をとゞめるふ。彼尚寧王才短く。慮足ふ。王妃中婦君濫して妬ぶく佞人利勇ふ執て政を放ふせーふよりりて尚寧王國頭の按司。司馬順德が女児を納て王妃とせんとすふ故あつてこれを止國相利勇が女児を納て中婦君とし。琉球の王妃を順德が女児を並妃並妃ハ妃の亞ぐ前編第三卷ふ見える。廉夫人是し。中婦君ハ稱ふ中婦君ハ才色世ふ勝れて殊に寵愛大かたうぶ天孫氏二十五世一万七千七百八十余年の仁政忽地ゝ廢れて國人叛き離んとそのとき世子なくて廉夫人の腹ふ王女只一人出生あり。尚寧王ふ。年の齡四十ふ向んとせしとき誕生あり。

初子なれとへこれ尚寧王女と名づけて。王子なれどきハ王女ふ位を侍ーふる。舊例もあれど中婦君ハゆくすゑのつゐをそひやもふ。姉ことかぶるれど。彼廉夫人へようづよ愼ふく。聊も寵をこのて驕慢る氣そなく。毎事ふ謙遜へ中婦君を敬ふあそ憎ーふそひなぐふ。足をあーさまにいひるとべれやうふて默止ろさう往ふ尚寧王女ハ成長ふ隨よ。顏色の倩なれらべきよふし孝ふよのつゐふ勝とその怜悧と。丈夫とふるも及ざるふ多くり。こゝを以て尚寧王いよ〳〵愛慈こゝの王女ふ位を侍ぜやと。そひのふ往ふ寧王女くや。十四才ふぞなりひね。抑琉球ハその國偏小よして。南北長サ四十余里。東西ハ狹くして。十里ふ過ざとるん。六十町を一里とふその都を首里とふその餘の郡縣と間切と唱その地の領主を按司とふ官位の品級正

従をべて九等あり。國相。元戻ハ正一品。法司ハ正二品。紫巾官を従二品。こゝをこれ國の大臣はして三司官と稱ー。又某地の親方と稱ゑ。又耳目官又御鎖側ハ正三品。謁者一名申口官ハ従三品。贊議官ハ正四品。那覇官ハ従四品。寮侍紀官ハ従四品。那覇佐敷當座官ハ正五品。勢頭官ハ正六品。親雲上ハ正七品。掟脾金ハ従七品。里之子を正八品。里之子佐を従八品。筑登之ハ正九品。筑登之佐ハ従九品。この外紫金大夫。正議大夫。長吏都通事。度支官。王法官。九引官。内宮。近習内廚。國書院。良醫所。茶道。祝長ホあり。枚挙ゐ遑あらず。およそ官を龍宮城の正殿ゝ集合。寧王女と世子として。琉球二顆の珠を附属。廉夫人をもゐ中城の世子殿ゐ移さんとやはしをゆえもよしとゐふ。衆皆荅ゐうけひそう。ゐ君齢半百ゐ及びゐえども。王子おしまさゞれども。孝順はして。且聰明膂智なり。これゐ位を侍ゐんへ民の望ところはして。國の幸甚ー。夫中城の間切へ世ゝの王子の采地あり。世子へかならず彼処ゝ移住ゐふをもて。世ゝ中城殿と稱ゐ今日ハ是福星貴人の吉日なり。常言ゐ甲内相邊入虎郷。更逢鼠位最高強といゝ。速まや定めゐんしと祝でもうせーかへ尚寧王太さゐ欲じ。ゐて里之子をもりて中婦君。寧王女。廉夫人を迎ゑゐふ。里之子ハ絆の遜を綰ちふしつゝ。うやゝしく珠の匣を捧ゐて。王女ゐ捜んとしゐふぞ。中婦君大ゐ驚き。そと注目ちゐもうべ。紫巾官利勇。忙ゝ斑そゝこ出。殿下をいふ。小臣がもうけるやと笑ま。往古天孫氏。この國を開てゐ以来。年ハ一万七千七百八十餘年。王子おしまさゞれば。王女ゐ譲手ふ及び。御代ハ五五の今ゐ傳へ。近き世ゐその例をやうぐとこと一ッ


龍宮城ト
大小諸司百官ト褒む



殿下ゐん年五十ゐ及せ給ふ。ゐ加之中婦君ゐ未
三十のうへ。多くも過ぎ給ひ。男子ハ八人女子ハ
七七四十九ゐます。陰道閉ぢ。この故ゐ老ゐ給ひ生りのなれゐゐ
べこの後王子誕生ましまし。とも。ゐひ定めざりし。これ二ッ王女天性怜悧
もろせごも。女流ゐり。世の常言ゐ才女の置きたてんより。愚夫の黙く
されといふ。つゐ王百年の後王女この國を御さゐ大臣政を放ちて。君の
威徳衰へん。これ二ッの可ゐふぎれをりて。古ゐいうゐとうおとふ。
譲禅授受ハ國の大事ゐ。安危存亡この一挙ゐあり。て禍蕭牆の下より
起らん欤。よく〳〵聖慮をめぐらされべうりや。と言語を巧はしてそゐる
ふこるその後威ゐや怕れん。送ふ面をあはして。ゆくゆく言を生とりの旨。
こゐお至り尚寧王ハ忽地よゐひ慰ひ。且く沈吟して。

毛國掛ゐる中山傳信録巻之一ゐおゐえゐう

よくうんと同ゐ。利勇喜て。愚案ゐりてまうさんよハ。世子を定めうふゐまご
延べふべ。王子誕生まゐ待ゐべハ。徳長ゐる大臣を女婿として。國を譲ゐうん
こそ。長久の計ゐくゐ。今日のうゐひとぶうの人ゐし。というその為体傍ゐ
人なんごとし。時ゐ左邊の斑をそこ生く。声を励ー。君王いうなゐとハ。
利勇ゐ巧言ふ惑されて。國の大ゐるを悞るゐぞや。こらふりのありけと。
衆人驚くこれをえかくとばゐ。その人年紀ハ二十有餘ゐして。ろ白く
眉秀眼ゐ鶯鳳のごく。口ハ真朱のごく。声ハ巨鐘ゐ似ゐり。阮ゐハ金
の簪ー。紫綾の官帽を載ゐ。身ゐ深青ゐ袍を被ゐく。龍蟠の紋ゐる。
黄ゐる帯ゐ結べり。この人ハこれ。前國相毛公ゐ子。國頭の按司。司馬順徳
ゐ姪ゐりけん。中城の按司毛國興ゐり。當下毛國興頓首ゐて申ゐひ
ゐう。利勇ゐ箇條の不可ゐ述べ。世子ゐ定めふゐ阻むその言理

あれふ似く。理よ稱つゞ。王子はしそ
近と世よ例ゐしとこれを止ゝるゞ。こゝ
上古の名改を廢く。先王の法則ふ悖ふあゝびやこれ一ッ今よう後
王子誕生あゝくうとそ。首嵐してゐを決一のゝゞるハ信天翁とふふる
の居るゞゝ食を待お似く。いとおぼつゝ白。王女中城よ立ゐのゝち。王子
降誕はしゝきハ王ハ位を王女よ伝人王女ハ又位を弟仲子ふ伝人ひえ。
國祚も久の基これふそんるやあれ。これ二ッこの國の習俗ふて。貴も賤
も女子ハ十五歳よう。髪をりて頭ふ龍蛇の形を花繍しゐを山しよう
よかよね習俗しとゝく。咲くゐのありとハくも。國の制なれべいふも
まゞなうしよ王女十二才の春。ふゝくこのゐを歎さ。脫折爪折して天
神地祇ふ訴。遂ふ王よ笑えあげて。改よ花繍さるゐゝ禁指の節の
本と。針りて刺。爪の際まで。ゐと修さ像を入ゝこと教さ。龍蛇の紋よ換
ゐひゝくゞ。賢ふも愚うも。便宜ふ従うとふ欲びて。王女の恩徳を仰
ざれうし。このほゝろ。するうら民の父母となりゐふ足ゐこれ
ミッこのゐの喜をべあるふりて。群臣ゝえて不可とまうひのなん
を。利勇が一言よ躇躇ーのふるのうゝと憚るまゝおく凍う。その直
言人の及ざる所はして。當然理ふ。利勇もこれと爭ひがくやおりひ
ん。阿容ゝと団ゐを。尚寧王ハ情由ふ付て申ゐやくにとひと。
ゐうりくとらくつ。好ゝび珠の箱を捧舎て王女よ對ひ。これハ
是。ゝる祖王天孫氏。この國を開ゝされ。虬を伐く民の害ふ
除さ。その腮よ裂ゝ切ゐひる。両顆の珠し。これハその一顆を琉と
名づけ。又一顆を球と名ばく。灰ふ開。唐士ふハ他國の王金あり。又

日本ゐへ琉球の人今ゟ以て ゟ國を ゟ致を 三種の神器ありて世て
の天皇相伝をといへり。ゟゞこの珠もその類也て。いと貴らべき神宝ゐ
こそ。今ようこれを御身ゐ附属を廉夫人ともに中城の世子殿ゟ伝
ゟゝべー。と叮嚀ゐ説示ーて。件の珠を王女ゐ遍ゐし。又毛國君と迎く
招きよし。卿彼地の按司さへれが。今日よう王女ゞ傅とん。ともかくも教
導ゆへと仰ーゟゞ。毛國君王上ゐ在を。微臣ゞ直言を
納ゐふこと。寔ゐ國の幸ぐと。ゟとうひをれへ。皆りろもゐ万歳とそ
祝ぎ唱ゟれ。その中ゐ利勇のこ。若こえて中婦君と目をえあじ。
王ゟゞ諫を用ひゟらゞ後ゐやゟゐゐ。と呟ぐなゝかくて
寧王女ゐ吉日ゐ卜を。彼珠を
て伯のへゞ。文官武官内侍宮嬪ゐ。おのゝ中城殿の王女ゐふり冊ぐ。

毛國君毎日ゐ出仕ーて。邦家の治乱。君臣の得失を物語ーりゐする
行よ。王女をえゐゝおのれを責て。ゐの行ひを慎ゐみかゝとしうば
尚寧王ぐ。ゟゝゝ中城ゐ赴ゐゝ後日ゐゞゝゞゞ王女の孝心等深
ゟゝざれを欽びゐみゐ。中婦君へ。いよ〳〵憤ぐ迫るゞゝぐゝえ
こゐあへゐぐさゞ。窮ぐ利勇と示ーあゞ。ゟゞ廉夫人をや結果ん
王女をやうしなんとて。ととまかうゝま胸をのこ苦ーめつゝらぐごその
便を求ゞしゐ。次の年の春よう。ゟゞゝ水神山神出現ー。海山一度ゐ
荒れて。漁戸農家世ゝうれ
せゐふとそ。間切〳〵の里人ホ國の霊場ハゝとゝく処〳〵の拝林ぐ指て。
笛を吹大鼓を鳴ゞし。ゝゐゞゝゐふり慰ぶとも。ゝえてその験ゐ
ゝゝう。大約琉球國ゐ四ッの霊場あり。ゐ一ハ山南省の玉城首里の

南の方へ一里ばかり。この処に天孫氏虬の腮を裂て珠を得る処と名づく。第二に山南省の豊見城。この地雲城ともいふ。第三に山南省の北谷むら。天孫氏虬を殺せしところ。第四に中山省の高嶺一名旧城。旧国王の両を祈るところ。第三に山南省の北谷むら。天孫氏虬を殺せしところ。第四に中山省の高嶺一名旧城。旧虬山といふ。天孫氏虬を殺して。その骨化してこの山ふうづもとといふ。今なほ虬塚あり。玉城。豊見城。首里の都より南へ當り。舊虬山へ西南へ當て。おのおの相去ること三四里へ遍ぞ。これを四等巡地と称ふ。さて琉球国へ道次の大木大石。ことごとくこれを神と崇祀て。殊さらに君真物と称る神へ開闢以来国のある護神ぞ。その神へ陰陽あり天より降るなど。さらいかるいのくんぬんとぞ。滅より上るなど。おかつかけらくのくんぬんとふ。一書

舞林のつ未の巻ふ註そべー

ふをくのくんぬん

りんとろくせり

その託女三十三人へ。こる王家ぶしてのみ人内親王を斎宮として宗廟へなべしまふがとし。その餘国中の託女へその数をさふべ。亦女王といふ神あり。国王の姉妹世々神の首として及ぶ。此神女国中の編歴。稲穂を取てこれを嚼。いまぐ女王の嘗ざをまへふ獲入る稲なり食ふとていへ立地へ死そ。こころかりて。絶て稲盗人なし。この夏子陽ぐ使録射肇渕が五雑組へ載て詳ふ。又彼君真物。怒るのあるとていへ国人脱折爪折とて。自潔ぬうのみをして。これを抜て慰るのいとも切ふ。又七年へ一回十二年へ一回出現のあふ神ありて国中へさふ。三十六の属島までべて一時へ出現をるのあり。これをきみてをりこ





君の真の神の物像



稱て上國王より下民かいろまでかりこゝ祭るゆゑんその神のたべて
まへお。年の八九月のころめをうとらふものゝ夢に驚言ばこの経ゆ五ろ
鮮明うる。種くの荘嚴ことをこの山を覆ひ場もぐごに。因てその
山をあをりが嶽とぼなし。神の出現近ことありとて待ぞ不果てその
十月ゆ至りて。件の荒神出現そ。そのとき託女と玉の臣下ホ。おの〳〵鼓
をうち。歌なることひてこれを迎引ぐ王宮の庭上ゆ至り。傘ご十本かり
次建ぐ。神の行宮とそ。その傘に大小あり。大ぎ丈ろなれい高サ七八丈其
輪十尋ゆおまろ。小さぎものごくども。高一二丈輪ハこれゆ准ど又山
の神のめろことめり。その数或々多く或ハ少く。年ようとに数
定なし。人面めろ。彼山の神をろろふ。その相貌ハ曚曨として定ろな
らねど。衣裳ハ袖の長ぎ袂ぎそ。その衣裳立地ゆ変ぐそ。あるひハ

錦繡のごく或ハ麻衣のごし。件の山の神ぬしの童女めし従へ。その名を二郎五郎と呼ぶ。これが衣裳ハ日本の制衣ふまねじく。小袖と袴なり。山の神怒るときハ童ハ鞭つてあれど童の鳴声犬の如し。

又おうらうう　一書ふうう　といふ海神のあるくさまあり。その神の身丈一丈あまりにて畢九尺ばかり深くる物語ふみあらび。日本の神ぬそぐ君真物と稱ふ。

れ僧。彼國ふめりくれ日正ふくそくるよし。骨董録中琉球事略ふ載られ。又五雑俎ふ謝在杭が云。中國の人琉球ふいくる。彼ハ代く治庵るるの親と神の出現もるふ。その声鳴こゝにして蚊の如しと。のくりかく奇しくるめりといへども。五穀を植ゑ。國人を害ふふいふろう。ふよ是羊山の神。水神いくる荒ゝ臭りて海山の挿了。その使ハを

うしろひ樵夫漁翁ふいくら。ぬくく欲び。竊ふ利勇と示あいして。腹心のくの紙処くの間切ふ遣し。國王忠臣の諫を聽まりで。寧王女を中城へ移し。世子ふ立るのふのるよ。君真物のめく神怒くそ。その禍を降しふとぞいいせられ。それハ一犬放を吠て群犬声ふ吠るふいひなれど。この風声嚢ことにして巷ふ満てり。かくいる行ゝ高寧王ハこの流言を信ゆゝく大ふ驚れ。俄頃ふ中城の按司毛國興を召ゝ。縛の趣をゆゝえきひし。虚実いと公りと已し。卿何ふふくれと問ふ毛國興荅ゝ。さでふさるのぬぐさ。これハ王女城ハーに函ふおりいしをいくんと計較りのぐ流言をれあそあくんぐらん。彼君中城ふ移りおハ生して。いふ行ひを慎こ。半奴のおん悦なれど諸神これを咎ふる生しるれそと官帽をかふけく

回荅もうせ～うぶ。尚寧王もそく眉を頓め。ちかうといへども。国民ホ豊見城ホ至そく抜徹し。或ハ処しの拝林ホ至て祭り慰め。又近香。こぐ～ト雲城ホおりもさて祈禱し。その外。北谷うる海神。高嶺一名旧虹山なれ虹塚ト幣帛を進～もうふ。終ホ應験なれハそのなめぐし。卿ちぐ～く退けぞれぬこぐ思念せんと。宣そるホ毛国押ハなほ理を盡して。王女のうへに。神の咎ホ高禀ふふなんよしをまうし明し。ホがて中城へぞ退りぬ。この時中婦君ハ一五一十を竊ぜし。簾をかゝぐく。冷笑ひつ毛国押を目送り。殿下しまぐ暁得ものぞや。彼毛国押そ。廉夫人が従弟なれバ。王女ホこの国をもよし。おのれ国相とうて威勢なふりうんと計校。曩ホも言を巧みして。王女ホ中城の世子殿ホ奪し。今ホ辞舌なふりて。君を惑しまるこそ。いと憎けゑ。と罵り弘。王忙ちく～えゝりてホて王ぜなとうら居らし。賢妃のいふ所も理あり。彼がまうハ所も理あり。それ暗～てホひ諦めぐし誰ぅこの利害ホ論ぐて。事の吉凶を定むべけと同ま中婦君かまよて紫巾官利勇ハその忠義ぬう。且遠ホ慮ありて。みどて彼ホ召て問ふべる。王女ぅんあ～かまとて。継母の腹ぐとう。ちうまうひうと君ホもおられ。人ホもいられまん。そハ歎ホてもあまりめれど。国の為ホハおひうもる由るし用まふと用ひのハざれとハ。こころふこそあるべくれと。涙ホしぐ～くかれ口説ホ尚寧王ぜもあへぐ。さぶバ利勇ホ召せとて。左右ホ仰せて。連忙～く呼そるに。且て利勇系しぐ。尚寧ノ王これをちく侍らしさ。毛国押がひつるまの一五一十ホ説ホしつ。卿何とうぞへれ。ゑくまあく回荅せよ。と仰られハ。利勇縁由をらひまうりて。数回歎息し。

王只一人の言を疑ふ。理ありや。もしそれ
今忽地ふ世子を廃ふて。毛國將謀反して
謀の足ざるを似ふ。殿下神慮ふ及ばれんことを。北谷ふ
託女の長阿公ふ同じふ人。彼阿公ふ前中山省勝連の親方法司阿高
ふ女児ふて。幼稚とて父母ふ喪ひ兄弟もなきしふ。先王憐ふて父の
舊領三ヶ所ふ一ヶをふろ。これを託女の長として。女君ふ唯ぜられふ。世れ
人彼を嗚ふ。北谷の女王と稱福を祷禍ふ攘ふて。響の物ふ應
ずれぞとし。彼原来人ふ嫁ふび。三十餘人の弟子を扶助して齢既ふ
六十ふあまれり。彼がる事君もよく知ふるべしのをと信ふうちて
もうんあそ尚寧王うち怠ふて。それ阿公がる事ふ忘ふこう。そ使を
遣して問せよと仰ふ。利勇うけふり。物なれる近臣ふ仰ふ
彼へ。女ぶて北谷へ参ふり。さる程ふ近臣ふ汗馬ふ鞭ふ鳴ふして。首
里の王城ふ生ふく。六十町道四里がほど。只一晌ふ乗つて。阿公が家ふ
到る。仰の趣ふ述もうすまふ。阿公ふ豫ふ利勇が伎倆ふ
の崇ありと。偽りて海山をあふするふ。彼ふ而為ふれば。ふくそのころ
ふ。殿の弟子託女ふおて。草圍ふ戴ふ浄衣ふうち被ふ。出迎へ
つ。仰ふうけあり。まづうちふ按ずるおりふもて。いふくまうびやう
こけとふ。大王既ふ神と人ふこのちふみたがひしあふう。天ふこの災ふ
ぎ降しあり。今これふ禳除ふ辰の年月日時ふ生れる女子ふ
残として。この海ふ投め。大王こぶふ讖悔して。水伯ふ祭慰めのふ
ば。神の鎮りあるもあらざるんり。ふうちふあのふぞれ國中荒廃れて。
忌ふれ大事ふ及ぶべしとふふ近臣これふ驚ふ又忙

ちく馬のうち勝ちく。その夜着里小馳うち阿公が勘ける縁由を伝え
めぐる。尚寧王ハ呆果ちく。まの舞足の踏ところをちふびる。まづ中婦君
お告ちして次の日利勇ホを召集合辰の年月日時ホ生れる女
子あくバ。今度の残ム進ちそべし。親ある人ハ。その親ユ田園かくま
ちて。生涯を安ふように過ヒ子あるものハ。その子に官職を授何ふ
まれ恩賞の事に任そべれバ利勇
ホらけまちり。中山。山南。山地の間切三十六の属嶋ム属託しく。普く
これを索れども絶ちく募ホ慈ぞれりのみし。尚寧王をあまりホ募
うみちく。有一日中婦君とこのる女
凡いたヒ治るりの誰ム命のを
も命うしまられてハ何ム世んこの國ホ辰の年辰の月辰の日辰の

附ふ生れる女子のなれあくぢめれど。親ハ子ぶいとをしこ子ハ
親を喪ふとて。名告も出ざれみこそいと理ム忘れ忘ちくまへりや。
寧王女ハ辰の年二月辰の日。辰の刻ホ生れ仕りねるを。殿下そふちふびし
顔あてあしまれそ。人の仏をも推てちうーめられよ。とふ王これ女子
て掌ム礒と拍げまちひ忘ちくうと。王女ム今茲十五才ほして。ちうも辰
の年月日時ユ生れあて。それ民の父母として。國の難ム私せバ。神もいか
でう納受あくん。是彼と索んよう。王女ぶ将として民の患を攘ひまん。
さハ必べくも。ムメくもめふぬ子をうしまるひて誰ム位を伴ふべた。これ尾を
投ふ畠ぶ忌の類うり。よしや災ぶ攘ふく。國安らうまなりぬこそ攘
る子なくハそれもかひなし。ぬ刀ハさももろぞや。とおりひくして問まへ
ば。中婦君答く。王女ハ民汲あれ子ホ仕まバ。ちうせんと宣ふのうも。

つゞ男ゐうそく助もうふせんと。こゝそ乞へ。公まづし八重孫のめしれと祈佐くんや。にんげ人の誠をあるハかくれ時ゐ佐れが。殿下試ミゐ毛國幣を召よ。箇様〳〵ゐ宣ふんゐ毛國幣半烏の私るゝ。王女も又孝行の志空しからじへ猶ゐるゝんる事ゐ希ひのめべ。その孝ゐを神も憐ミ。つゞ子ゐ捨てゝも。民を救んと思ひるゐ王の賢たにて猶を。國人ホ感激せハ募るのみぞと。王女の男ゐ悉なくて禍を地ゐ攘除た佐を佐人のふゝも再崇ハ佐らじとさゝしぐちられ言のまゐの伎倆の罠ゐ入て。とハちぶしてゝ尚寧王を。だくぐ〳〵ちもまて。大ゐ欺ひ佐ゐ所業ゐ。これぐかりのるゐ。公つゞりしこそ愚なれと慚愧て。只管ゝ嘆賞し。ゆゞて中城ゐ使ゐをして。毛國幣を召さしろ。

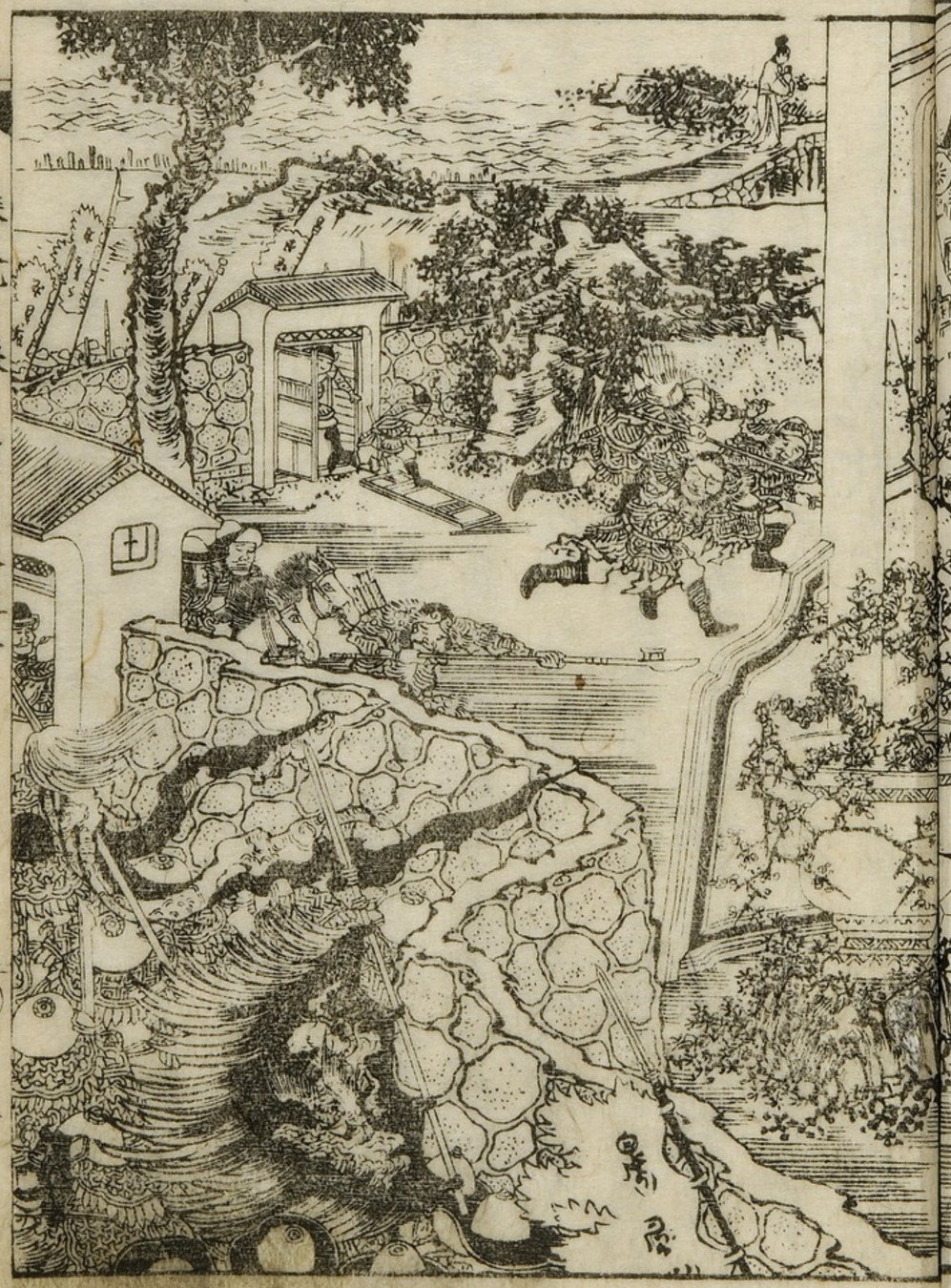
第三十四回

寧王女朗を棄て嶽ゐふるゝんと議を
廉夫人妹ゐ連て更ゝ母ゐ悼む

尚寧王へ。痒の甚ゐ。いまゞ〳〵中城へ佐よ世の風声をうれ佐て。有一日廉夫人ゐ宣ふやう。海山の荒ろゝるゐ神の祟ありとぞいふなれ。このゐ恙ゐ。活業のよろれ失ひつる。民の數さもいと痛し。父王も足のこゝ仏。さこそ仏苦〳〵おぼしめさるゝ男朝ゐゆふるゐ。仏折〳〵。君真物を祈ミても。誠の道ゝ稱ねゆや。そゝとぞふ驗もなし。おうれふ北谷の託女阿公が勤まうせ〳〵はしとやゝくふ。羊も月も。日も時も。うま辰よゝ生れ合ふる女子ゐ猴ミして。水神ゝ進らせなべ。世そのどゆふなるべし。とゞえあげしハ。やゝて國中ゝ屬託〳〵。その女子ゐ召ゝとぞ。かれバつゞ男の生れ〳〵羊月ハ阿公がい

とこゝろ符合と。翌ハつとめて首里ふこふり。その名を旅そ。こゝ
神よ進ぐせるん。今宵ぐりの名殘うる。みそゝん後ハともかゝもそう営
せるへし。とのひうけて目ゟ拭ひるへハ。廉夫人笑もめへぞうら驚とこへ
必ひもうけぬ。金の枝玉のろまぶ。世をもちひるべれ。中城のもん外
みて。よや國の為ことて。嶺としうそんと宣ふとも。これを許ーるん
や。かゝらんるへ。戯ともしも宣ふな。さゝねぶ佞人ぞゝら眼を睜耳ゟ
側つ。中婦君ゟ苦んとて。隙を窺ひ
寧王女かゝもて。いるそゝぐの人のう
あゝくしく。人ふおとしめらるゝ宿世
ようが影護も。傷ゝくゝ。勲ふ中城よ遷されて。嫌忌の中ふ
世ゟ食ふ。高ゝ梢の風よ折らるゝゟ
殺して仁をゝし國民を救るが。神も憐ゝ人も喜こそ。その應報空ーうぶと
て。王子誕生めゝんふこよなれ國の福也。ゝ王子誕生めゝんふこよなれ國の
孫ゟして。臣下ふゝなれゝの。なさゝしも佗ゝびそのひとり二人をゝ
へ。ゝが子ゟ七父司馬順徳。それが親族の毛國男うんどこる天孫氏ゟ子
孫ゟふびや。これゝが子ゟも養ひて位を傳ふとも。その院そひとつ
形ゝ。他の邦ふ子ふ傳そ。徳ある人ふ讓ゟ。聖の世として後生でもいと
いと誉るとゟそゝう。親ふ先ゝゝゟ悲ーてるましぐうも佗ゝ統ど。
病て墓形ゝなるゝべ。そびやらゝとも。いうまん。何ゟも國の為し
とやゝし涕ふまへし。こゞ子ゟそひ給ひて慰ふまふ。廉夫人
も誠ふる。その言のせふを笑ばなは。胸まゝいゝゝぬさゞりう實ふ所理
なれど。又この子ふもなりてほ統んぜよ。ゝゞ父司馬順徳ハ王女の誕生


司馬順徳
殞死ー
其妻章氏
赤子を抱て
宜野湾へ
脱ろ



司馬實極が王を代りて死人と祈らしむる事中山傳信錄ふくろう

しを。順徳ふくこれを勸て君真物ふ祈誓してその身をりく王

お代に死んとねごふ願るの誠忠を神も憐てや。王の病愈ひき。

あうれふ仮人なり。窮ふその幣帛に血を塗釘を打。司馬順徳こそ。

物体ふくも君王を調伏ー。おのれこの國を押領せんとそと。讒者の舌の

剣ふ鋭く。王のこうを鈍れがこれを客事として。縁故を正ーたまつど。

ず討まと向られよう。されば可惜忠臣も。身のめれ衣かはーあへど家

ふ火を放順徳ふ腹うれ切て失ふられば。主ふ苅らね家隷郎黨に

ちごべさしちごべ煙の中ふ死をるもあり。ふおられて生物られ首と刎らる

ものもあり。母ふ父が後妻あそ。ごみふ継ーしどど。ふざま雄しく。

幸ごて當歳なる。妹真琦をうれ抱き後門より走り出。往方もらざこ

ありねも。又猛火の中ふ跳り入く。親子三人。ひろ煙と立冲ねとも

ゆえく。定うるふべ。そのとたふ刎首も父の罪ふよりて。宮中ふ追る

べうしふ王女胎内ふおいーはして。既み臨月うるふりて。その制度ふ

及ずれど。只王妃ふ立られんうをを止られく。利氏を納て中婦君と

そ。ここる利勇叔侄が所行ふ女子の悲しさい明白

おいふはしも。ここえて汀の独木舟。

濱の小夜衣。形なれ身を注ぐう。

離ると。世の世言ふいくるもうぐるう父順徳討れく後ふ従身るうる

毛國將のこ外ふちかふーなれうのるく。針の莚ふ坐るがてく。嬰き

中ふいく行るく。王女ふ産もりしが王もありやくに暁るひん順徳

ゝ討せしめ後悔の氣ありとこゝろえて。つぶ〳〵と
憂を慰めつゝ王女の成長をまつ事を。十ろ
ちよろよろよ。ゆくすえいと
永代万代久後祝ふ十ろの元の舎を化して民を救んと宜ふそれ
仁ありてこと〳〵ぐら。その臣下のうへ
を賢て君とまつりし。よしなしごと言語を盡してそ
とべ王女熟〳〵果て歎息し朝ゐそれて夕ふ死を蜉蝣とふ虫そ
命ハ惜むとき〳〵のを。親の歎きもかくのごとそ。世〳〵の護の國を棄
王位を棄て只管ゐ死んとねがふおハめねど。かゝれど父王ハ後
者のまつりごとを実言として。人を疑ひのふるまひあろう。此度
猶よなるべくのを募のふ。その人を
ばとも。利勇ホがやうにさゝめて。不思議の仰あるべくも量ごし。そのとき

固辞なるとも。さふとて許しのふんや。はし又別ふその人ありとも。罪
なくの人殺さんハこの身ふ摘くいと痛はし。異國のいふへき老
たる親を野ふも棄山ふも棄し例ありと。ゝくハ実欲見ハ又それふ
も劣ゝぬ神慮人をりて猶よ寇る國俗こそ悲しけれ。夫ま
くもごめがくたハ有為轉変の理り。去てふたゝびゆふざるハ冥土黄
泉の別也し。愛惜哀慕の悲しこと。今ゝよゞめねるなれそ本の露
未の雫。先ぶつも後るゝも別ゐハいづをおなじかるべし。袂ぬれつゝ立ながふんとしのふ袖を。廉夫人ひとゞめて。こゝ物ふやれひろふ
君王の仰あらバ是非ふ及がそ。ふうふ求めて牛馬ふ身を比しのふ
ゝと。逆ふ諫め諫られ。縛果しなれ折しもあれ。按司毛國押咲して廊の方
より徳ゝ入り。欄干のもとに半掲ゝしこれ翌卒 簾のほとりふ跼躅し。

ん爲に衆と國民を救んと宣ふ。中城殿の北仁公ふられ又理死速く禁めらるゝ廉夫人の恩義重たいづれをいづれとはたがたゝ一五一十そ彼処ふて竊泣し不覚ふ感涙を拭ひあへぞゝひ。抑今度阿公が勘せ。徳の薨を按ずるみこな詭の計策ふて。彼が如より出るふいあふべ。こゝ王女をうしなひまふんと計校悪人ぞふがいわせーなるべ。今朝も君王小臣を首里の王宮ふ召さして潜に仰つるのあり。その夏別義あめふべ。近曽普く國中城募れみ猶よなるべれ女子を已王女は怜悧なのも彼ふ問ふ。その人を定めよ。これふ千只私とうの愛子なれべいと不便みこそ。と宣ひ。これ全く。王女こゞろ猶ふるりて危窮を救へ。と仰そべれ謎心と措せーこゞろけのるる。と中果く退出の比がと語るも果ぬふ廉夫人ハ声を惜そよゝと泣く聴輾こゞろのりし

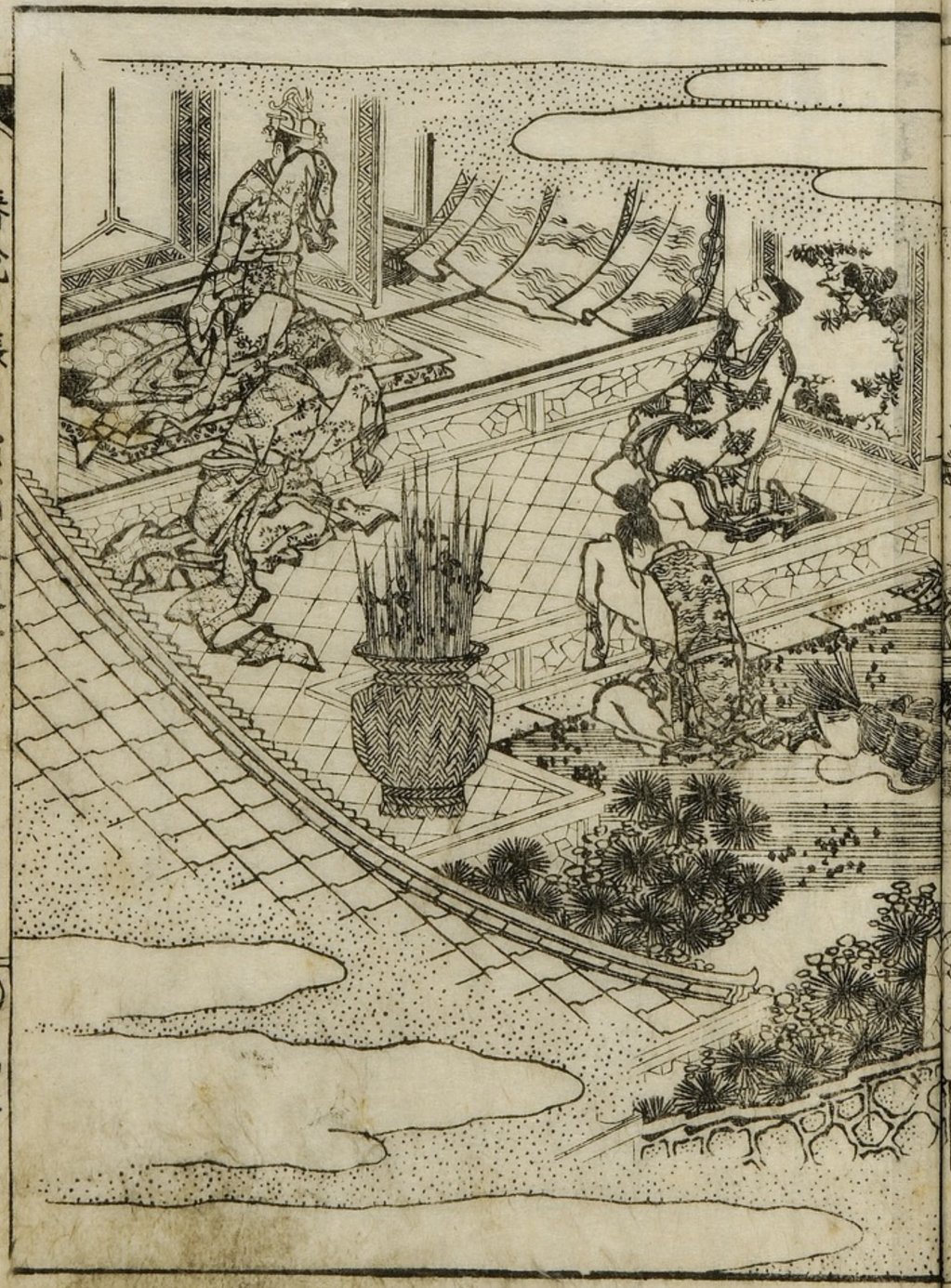
かゝね。人のこゝろる悪人ぞゝふが伎倆とありつ。一言も漏をまゝび阿容阿容と退出ふ利勇ふふ相語れてう中婦君のおそろゝくてう君なりめーさゝねふ。ゝもるのありとも。國ふ一人の世子みはしまんの死ねし。と宣ひてるこそ理ふなれ。うふめしたハ君のはゝろ。いひびなれハ毛國押阿公が勧ぬうせし生れ羊ふハ合ぞとも。ゝふ身を猶ふ進てせよとうへもぐゝもうれはゝ説勲さ孫まん涙の濫のいとぐ王女ハ慰めうふ。これこそをひゝこと。こるこれ過世の悪業うふ人をなうゝみもひそ。と脅ぬ拭ひとゞ毛國押ふこの形勢みも驚を。膝をゝめて声ふ細うし。とゞうゞ笠ふ臨と変よ変ゞ。這奴ふが伎倆のうふかく謀めり。後王女。ゞゞうら猶みうふんとて。北谷ふ赴たゝまふとも。

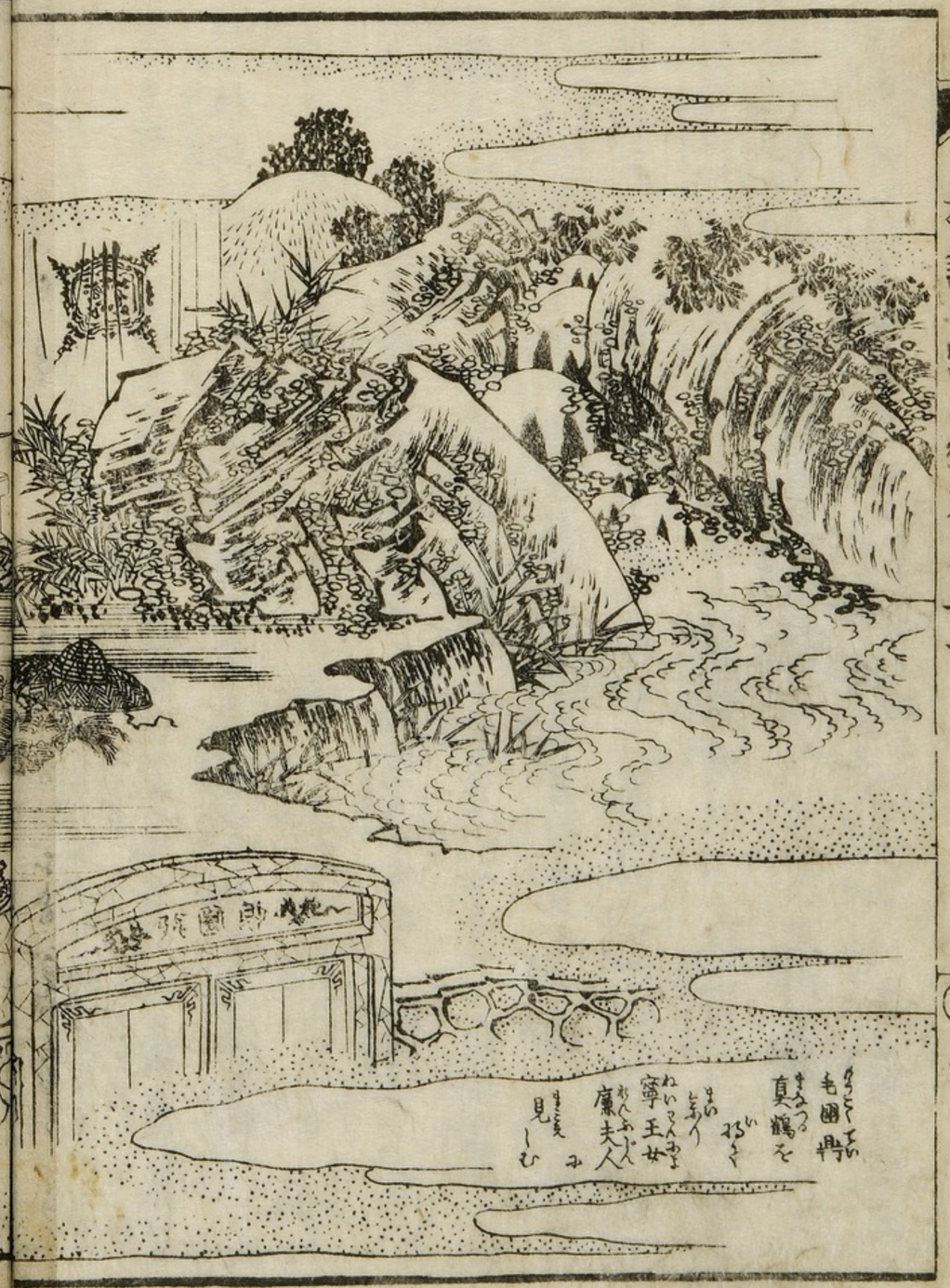
毛國男かくてありへでおん身ゐ恙あるに偖〳〵もふ折ふらふびも将と祈ふんこと況公若〳〵そふまうひ。女子をおろ〳〵ふりてゐこやくをいとい〳〵て花園の猪折戸を押ひらき走り入つ孫廂の縁よまを掛け伸上る賤女みづ〳〵容止ハ磨ぐでを。裾短ゐ引折て府衣の帯猪びさげ。脊ゐ負ふ蔦裏の軽れ打物も愛敬つれど。年ハ三五の月の眉。令る花をこれがごとし當下毛國男ハ王女廉夫人ゐまうひ申う。彼ハ宜野湾の山里ふを窶〳〵て母成養ひ芭蕉布ゐ織て生活となりのうるが。忍け旦で。王女と同庵ゐしてあうも三月。辰の日辰の時ゐ生まれ。父討とつる頃へ繦褓の中ゐありしかば。伯母のたゞひ葬付ふざりしの物ごゝろをおぼえてある。父の最期ハ夢なれや。そのとき母う懐まれて抱て猛火の中刀剣の下ゐ脱出ふ立潜び。両ふ濡れ袖ゐ泣あうせし行ふ母章の媼へ

新城具志川ハ宜野湾の属村

ゆきあひ。情由をゆて。直ゐおろ〳〵まうねやよ小女。汝ハ素生ハ窓ゐまうせ〳〵とのそうせへ。少女ハ膳せ一氣色もおく。藁裏を押掩ひ。佐牌二ッとり出して。縁煩ゐふみ〳〵ふべ居名告まうひも恥しれど。國頭の按司。司馬順徳ゐ女児ゐて。真鈴と呼れ行り。

名を匿し世ふあるかひも新城。親子〳〵具志川ゐ袖なべつて泣あうせし行ふ母章の媼へ三年以来。長れ病ゐ




毛國男
真鶴を
いろく
寧王女
廉夫人
見しむ

うち日ごろ。友哺の孝も負しと家ハ意お任せぬ。世の價賤し詰ろ難難。況同慰る友もなく。妍君ひとりありとハ。都の花ハ鄙の風。雲りがちなれ。我と恥と。風の便もよすがなく。このミおかひ侘。ほうふ今度大王より。辰の年月日時よれし女子めぐ。猥ハ進ずせよと國中お令ぢして。普く募ぬへども。王女こゝろのまゝ。ん郎お捨て。我おなりぬと風声をつゞ母これをヲて。大ハ驚れ。詮ハ辰の年の二月。上の辰の日。辰の時お生れるがごとく。廉夫人懐胎ぬて。後の添生ハ臨月するはしとヲぬ。ぞふ国ハ辰の日辰の時お王女誕生ましくけめ。よや國の為しとて。世子の位お捨て。猥となりぬふと誠しかぬるまでも。かくれ不思議の制度あぐいふお。

の汚名を雪ひべとハいふの時なり。今ここそあれ。ハ才も國頭の按司司馬順徳ねーの女児なり。事に臨こ。お打ちて挙止して氏も言ハ不及とて笑られまる。廉夫人ハ王女ハ君あてはしませども。世ゆしあくふ外戚の擁をも汚もじかれハ恩義いとく重しこく中城まおりもをて。親族毛按司ま名告めし。母ハ志をもいひもちびして。此度の猥おこふりのへ。それ勲ま。病髄ひくなりぬるのこゝぶ。ハ才が今般の公かゝるともなりなん。いぶらべ面あろ刃お伏して。後のやひあらせじとハいふ短刀と閃りと引抜ハ自害して失まひし。母の最期お練られ。泣もぬる泣ま一世の別ま。いぐ涙おられ竹のよふれ公を鬼ぬしてこうしてぬる亡骸を煙とぬして主のぼる。浦添山もうくめしく世おハ安波茶の里

浦添山ハ宜野湾おちじ安波茶。普天間又普天間と。牧港。伊祖の村くいふる浦添お属ぬ辺ハふる中山省ぬど

遠江敷智山今も普門山と云寺旅ぶの枚港いそぐとすれど伊祖村の
あるとふこゑゆる姑場嶽これやらむ父の死出の山波女が冥土の中城衛
尋ぶりしも。これ足ハこれ父の位牌これハ又母の位牌親子三人が切るの頸
命やれくと亡父の忠義称てさしもひねとそひ定め物がうり。長江紋
を絞り。廉夫人ハ少母ふうれ拭へども落る千行の涙佛かく
あるよそんと子を殺し子を諫る母親の最期を今もそろ仏地ーく。
轉び出つ二ッの位牌を紬ふ抱くく亦もだし。狄入でうり歎をしかゆうゆ
ふ涙を拭ひ。喃さ語。れこそハ父が姊又恐くも見るハ王女みく
在をなれ。そもうぶ父ハ世ふ稀なる。忠臣なれど過世あーくて誇者の舌
の剣ふて。討とひーそのちハ母の往方も妹のるもらひ出れね九重の。
國津都ふ給る人の姊ふ為氷を。はる。そひハ水鳥の浮宗よ待ふ
ぶふ忘うくに隙ハなりひハ数うくだ。母の最期とゆうワビ
なは。歎き泳信を紬る今度の難義産なりし姫乃みふ
代らんとふその人ハ母ふ義理ある妹るり。とてもかくても安うゐね。公の
駒も勇難さ。おなじ道ぬぞ踏迷ふ。強面りのハ命も。とらハくみくく又
ようと注ハぜ語ハ皆ふ走り登うんとして身を恥ろん。登りもえせど伸
上り。そん姊君ふそおろせ狭。差なれ。
志ハ改ーなり。命らゐれふ。
歎きそうゐゃうん。情ふと怨ぞれハ。寧王女ハ是彼の。公のうちとそひ
ゆり。感涙とぶめあくゆうぞ。あれ君のぼせよ。仰をそれべ。毛國典う
ゆうり。ぶて生の語がまを携て。はとり近くおてこゑりつ。王女つぐと
離て。撫ひもそうひー親子が忠孝げふ順徒が妻も子なり。かく

有がたき孝女を殺さんぞ。いそぎ神の受納あらん。志ぞ賞するにあまれど。是をも忍ぶべくば人ゆしてこゝろ獣よ劣りなん。こゝろ愈しのへ。まろが頭へ面正しく。こゝ仰そもえんぞかし。せふこら仕へ。いづれの時かわが父が汚名を雪めん。仕へべくば生ながらへて命を君と親

こそ遊ぶそる。笑食うみけられぬ。おん仁なれお似ず。さへおぼさぬぞや。と回答つ。姉のうと成ん久しぶ。廉夫人点頭て。健氣な生質。忠と孝とふ文を屠る。世も比なれ少女ぞと。誉らく薄命貧家

の母を養ひ。こゝろ長閑に春もあらぬ。令るゝふ散る花の牙もあるぞ。果の痛しとて。代らんこれもあらねばいく回數をしてもそのかひなれど今環會喜にふ聖の別をゆひ。れて。ある胸苦しとかい抱る。脱もちふなげんろ。さればとて寧王女ハなほこれを許しがたし。

さるべく諭しまへ。毛囲将すこと苦て王女も夫人も仏安くおぼしめされよ。なほ猶とるとも。小臣そらあべたゆうあれば。命を隕さるるのみにぞ。一旦彼が忠孝とは。てもん救を蒙らせん為ふ假よ猶ふ進ずるのこ彼世の中ひろくなるこの中城殿ふ給ふべ。生親雲上ふ武士のもひろん。仰るも。小臣ふらまにしまくとて。いと頼しくもうしけり。

椿説弓張月續編卷之二畢

徐舟校